

## 徳島県知事賞

### 水と共に、未来を拓く

鳴門教育大学附属中学校 三年 柳本 紗那

優しき水が牙をむくとき、それは町が飲み込まれる合図だった。

昨年の八月二十九日、雨が降ってはいたがいつもとさほど変わらない日だった。私は塾を終え、外に出ると、尋常でない大粒の雨が降っていた。傘を差しても意味のないほどの雨で足元はすぐにびしょ濡れになった。いつもの日常が、濁流にのまれ、一瞬にして街を支配していたのだ。車は、進みづらそうに、もがきながら進んでいる。それでも、押し寄せ、水は、境界線を消し去り、側溝の位置もわからなくなり、人間の判断を鈍らせる。ここで立ちどまってしまおうと私まで飲み込まれてしまうのではないかと思った。また、経験したことのない津波は、この何十倍も水が押し寄せてくるのかと思うと恐怖だった。いつも自宅まで三十分程で帰れるのだが、その日は自宅周辺も冠水し、迂回をしないと帰れず、帰宅に一時間も要した。水の脅威をこんなに身近に感じたのは初めてだった。そして時代と共に変化する異常気象に対応していくためには、今後さらに生活インフラを整える必要があるのではないかと思った。

私は、小学生の時に学んだ稲垣監物物語を思い出した。私の住んでいる鴨島町は、日本三大暴れ川として有名な吉野川と江川、飯尾川と3つの川が西から東へと流れている。一七五六年、その吉野川が洪水で氾濫し、牛島地区は甚大な被害に襲われたのだ。それを見た稲垣監物という人物は、藩主の反対を押し切り、一晩で堤防を完成させ、村の人たちの命を救ったのだ。当時の一人の大きな一歩が、今日の大きな一歩へと繋がっている。こうした先人たちの知恵や工夫は、とても偉大な遺産であり、だからこそ、私たちの生活は現在まで大きな被害がなく、生活が守られてきたのだ。現在は、その堤の場所が定かになってはいないが、あったであろう場所を私は、毎日通学路として利用している。その場所に稀にゴミが捨てられているのを見ると、とても悲しい気持ちになる。歴史を知らない人がいるからこそ、平気でゴミを捨ててしまう人がいるのではないかと思った。この堤、この町、その川を守るために私たちにで

きることは、この歴史を後世や人々に伝えていかなければいけないと感じた。

水は時に脅威となる一方で、水は常に私たちにとって欠かすことのできない、最も重要な資源でもある。毎年、ゴールデンウィーク明けに田植えを行うため、春になると、まず田んぼに水を引いてくる水源の整備を行う。我が家は、川や用水から引いてくるのではなく、田んぼの隣にある皿池を水源としている。今年も倒木を取り除き、周辺の草を刈り、パイプの詰まりがないかを確認した。近年の異常気象により、特に夏場は雨がほとんど降らず、必ずといっていいほど水不足に陥る。自然を相手にする農作業は、毎年が真剣勝負なのだ。そして、水は私たちの生活にいかん重要で、貴重なものを毎年知らされるのだ。川にはいつも水が流れている、池には水が溜まっている、蛇口をひねると水が出る。これは、当たり前のように、決して当たり前ではないのだ。私たちは、蛇口の向こうにある自然の恵みや、水を届けるため管理してくれている人々の背景に私たちは感謝の意を忘れてはいけない。

優しき水は、普段静かに私たちの暮らしに寄り添ってくれているが、特に姿を変えて圧倒的な力をむき出しにしてくる。これから私たちの住んでいる徳島には、いざれ南海地震がやってくると言われている。その時、津波という形で水がまた牙をむくかもしれない。しかし、その姿を前にしても、私たちはただ恐れるだけではない。自然を知り、過去の知恵と今の学びを胸に、未来へと備える。その積み重ねこそが、水と共に生きるといふ事なのだろう。